

令和 2 年 6 月 3 日現在

機関番号：32670

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02650

研究課題名(和文) 中国東北における植民地化を境界とした文化の接続あるいは断絶に関する研究

研究課題名(英文) Study on connection and break off of the culture in the North-East China at the point of colonization

研究代表者

平石 淑子 (HIRAISHI, Yoshiko)

日本女子大学・文学部・教授

研究者番号：90307132

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：植民地における文化活動に関して、それが当地の人々にとって自然な活動であるのか、それとも強制的にゆがめられたものなのか、それを知る為に、植民地化以前の中国東北地方の文化活動について研究を進めた。具体的には2つの方法を採用した。一つは、東北地方で生まれ育った人々の文学作品を分析、考察した。もう一つは、東北地方の植民地化に深く関わった日本人の文化活動の様相を観察した。そこから、まず清朝末期の中国東北地方では、我々が想像するよりも、より頻繁に中国本土との文化的交流があったことが明らかになった。また、日清・日露両戦役を境に、現実の中国に対する日本人の見方が大きく変化したことも分かった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

清末の中国東北地区における文化活動については、これまでほとんど問題にされず、むしろ文化的には不毛の地であるかのように捉えられてきた。清代に流刑地として使われ、多くの文化人が送り込まれていたことは分かっていたが、今回の研究を通じ、彼らが東北の文化活動に大きな影響を与えたこと、また彼らだけでなく、清末に当地に送り込まれた本土の役人たちによって、詩社などを通じた豊かな文化活動が行われ、当地出身の人々に大きな影響を与えたことも明らかになった。

研究成果の概要(英文)：In order to know cultural activities in colony were either natural or forced to be distorted for the people living there, we studied the cultural activities in the Northeast-China before its colonization. Specifically, we took two methods. One was analysis and consideration of the literary works of people who were born and raised in the Northeast-China. The other was observation of the cultural activities of the Japanese people who were deeply involved in the colonization process of that area. Through such studies, it became clear that in the northeastern part of China in the late Qing Dynasty, there were more frequent cultural exchanges with mainland China than we imagined. It was also found that the views of Japanese to China in reality had changed dramatically after the two wars: Sino-Japanese and Russo-Japanese Wars.

研究分野：中国近現代文学

キーワード：植民地化以前 文化の連続性 文化の断絶

1. 研究開始当初の背景

近年、日本が歴史上深く関わった植民地としての中国東北地方や台湾に関する関心が高まり、研究成果も徐々に生まれてきている。報告者もそれらの活動に加わってきた一人であるが、それらの活動の意義は大きいものの、一方で人々の関心が主として植民地化以後に偏る傾向があることに、疑問を抱き続けていた。

報告者がもともと関心を抱き、追いつけてきたのは、中国東北地区で生まれ、育った若い左翼系作家たちの文学活動であり、彼らの活動を通じて、植民地、及びその後の日中戦争（抗日戦争）に至った歴史的、社会的経緯と問題点、また植民地化された特殊な社会環境の中で文学が果たす役割、文学が持つ力について考えようとしてきた。即ち、植民地化が、強力な外圧により引き起こされる、当地に居住する人々の意志を無視した社会変化であり、結果として当地固有の文化や生活、歴史を封じ込める、ひいては否定する行為であるという認識が前提となっていたのだが、研究を進めるうちに、当地の文化や歴史に対する強圧的な「変化」、あるいは「否定」の根拠はどこにあるのか、という問題に行き当たった。植民地化による文化及び歴史に関する変化、もしくは否定があったことを証明するためには、本来それ以前の当地の歴史や文化に関する状況を知り、それに基づいて植民地化前後に関する検証がされるべきである。それを置いたまま、植民地化によって加えられたさまざまな外圧や、それによってもたらされた人々の不幸を語ることは、歴史の表面をなぞることにはしかない。植民地で生まれた所謂植民地文化のゆがみ、不自然さに対する語りは多いが、本来当地にあった文化から見て、どこがどのようにゆがみ、どのように不自然になったのか、という点に関する検証は、未だ十分とは言えない。

報告者は、以上のような状況の中で、以上のような問題意識に基づき、「植民地化以前の中国東北地方における文学活動に関する調査と研究（2013年度～2015年度、科学研究費補助金（基盤研究（C））（以下、研究2013という））」を行い、植民地化以前の中国東北地方でどのような文化活動が行われていたかについて、20世紀前半に当地で発行されていた新聞の小説欄に注目し、所謂「新小説」の出現に焦点を絞って分析を行った。その結果、当時の中国東北地方では、当地固有の文化的発展は発見できなかったものの、比較的早期から、中国本土のみならず、日本やロシアなどとの文化的交流が見られ、影響関係にあったことが明らかになった。

中国でも徐々に研究や資料収集が進み、研究者同士の国境を越えた交流が行われるようになってきたが、研究者たちの関心が相変わらず植民地化以後にあることには変わりはなく、植民地化以前の調査に関しては、なお未開発分野と言って差し支えない状況であった。また特に、恐らく政治的要因によって、中国の研究者たちの植民地化による「文化侵略」を追求する態度には、基本的に変化がないと言って良い状況が続いていた。

2. 研究の目的

これまでの研究、また今後の研究を通じての報告者の最終的な目的は、日本人が植民地化に深く関わった中国東北地方を一つのモデルとして、政治や社会の変化が、そもそも人間の自由な精神の発露であるべき文化・芸術にどのような影響を与えるのか、文化・芸術は政治的、社会的な外圧にどのように抗うのか、抗えるのか、そもそも文化・芸術が人々や社会に対して持つ力とは何か、文化・芸術の社会的貢献とは何か、そういったことを知る所にある。そしてそれを明らかにしていくことによって、日本が関わった植民地や、そこに居住する人々に対する歴史的責任の果たし方も見えてくるのではないかと考えている。

本研究課題は、研究2013の成果を引き継ぎ、さらに発展させるものであり、また本研究の成果は次の研究課題「清末民初の中国東北地方の文化形成における異文化接触の様相とその影響」（2020年度～2022年度、科学研究費補助金（基盤研究（C）））に引き継がれている。

上に示した最終目的に向かう過程における本研究課題の位置づけ、目的は、研究2013で明確にしきれなかった、東北にアイデンティティを持つ人々の文化活動を知り、当地には元来どのような文化的基盤があり、それがどのように引き継がれ、発展してきたか、さらにそうして育まれてきた文化が、社会的変化によってどのように変化したのか、もしくは変化を余儀なくされたのかを明らかにするところにあった。

3. 研究の方法

(1) 資料収集、(2) 資料整理、(3) 作品の考察の3つの段階に分けて研究を遂行した。以下その各項について述べる。

(1) 資料収集

植民地化以前の東北地方の文化的状況を知ることのできる資料は大変に限られている。本研究では、研究2013で使用した東北地方発行の新聞資料を中心に収集することとし、また研究2013の、東北地方発行の新聞掲載の小説に、東北地方としての個性、もしくは新味を発見できなかったという経験に基づき、作者の心情をより如実に表現していると思われる詩に焦点を当てることとした。

一年目はまず瀋陽（奉天）で発行されていた中国語新聞『盛京時報』から、旧詩、及び新詩を抽出することとした。但しここでの問題は、まず旧詩、新詩にかかわらず、作者の特定が困難であることであった。特に旧詩の場合は日本人作者の可能性も高いこと、新詩に関しては中国本土の詩人の作品の転載が多いことで、もちろん東北地方独特の風景を歌った作品も存在したが、作者が明らかにできない以上、ここから東北地方独特の個性、感性を見出すことは難しくなった。

『盛京時報』に関する調査と並行して、各文学史、及び文学史家が言及している清末民初の詩人について、調査を行った。その結果、「吉林三傑」として評価の高い3名の詩人（成多禄・宋小濂・徐蘊霖）について、彼らの作品集を入手することができた。このことが本研究を大きく前進させることとなった。

三年目に入り、植民地化前後において、同時期の日本人が東北をどのように見ていたのかに関する資料の収集を開始した。日本人の中国に関する言論については、以前より関心を持って収集を始めていたものであるが、本研究では彼らの視点をより如実に知るために紀行文に重点を置き、多くの日本人が訪れるようになるきっかけとなった日露戦争前後からの作品に焦点を当てて収集することとした。

また日清戦争後、東京に清国公使館が開かれると、清国公使館員と日本の知識人たちを中心に、活発な交遊が見られたことが、王宝平氏らの研究によって明らかになっている。清国の人々との交遊を求めたのはどのような人々であったのか、その交遊の様はどうであったのか、ということについても、植民地化以前の日本人の中国観を知るための重要な資料として調査、収集を行った。

(2) 資料整理

『盛京時報』に掲載された旧詩、及び新詩に関しては、一覧ができており、研究2013で作成した小説の一覧と併せ、データベース化することを目指している。

また、王宝平氏の労作である『晚清東遊日記匯編』（2004.10）に付されている人名索引を基に、そこに記された人物について調査、整理を行った。

(3) 作品の考察

上述のように、一年目は大半の時間を『盛京時報』掲載の旧詩及び新詩の収集と整理に当てることとなったが、その後、「吉林三傑」の作品集を入手したことにより、彼らの作品について考察を進めることとした。さらに日清・日露両戦役の前後に中国に渡った人々の紀行文や、明治初期、日本にやってきた清国公使館の人々と交流した日本人を中心に、考察を進めた。

4. 研究成果

上述したように、当初想定した『盛京時報』掲載の旧詩、及び新詩からは、思うような成果が得られていないが、ある程度まで整理が進んでいることは、今後の中国東北研究に資する部分が大きいと考えている。将来的にデータベース化を目指したい。

当初の想定通りに研究が進まなかったことは事実だが、研究の過程で「吉林三傑」の作品集を入手できたこと、また王宝平氏の研究成果を知ることができたこと、そして三年目に長春で開かれた国際シンポジウム「コミュニケーションという視野の下の東アジア植民地主義研究」（吉林大学）に参加したことは、本研究に大きな進展をもたらした。以下、本研究課題の成果として、成果を何らかの形で公表したものを中心に述べる。

(1) 宋小濂について

東北で生まれ、育った「吉林三傑」の中では成多禄が最も多く作品を残しているが、本研究では宋小濂（1860～1926）を選び、考察を行うこととした。その理由として、彼が清朝、及び民国において、役人として長く東北の行政、特に辺境警備に関わったということ、彼の詩にはその経歴を反映し、彼自身が涉猟した東北の風物が生き生きと、親しみを込めて歌われている、ということがあげられる。

さらに、彼は1904年にはおよそ1年をかけて哈爾濱でロシア側との森林伐採権をめぐる交渉にあたり、その後、モンゴル族の居住地である呼倫貝爾副総統に任じられる。民国成立後は黒龍江都督に任じられ、最後は東省鐵路督辦の任にあり、当時の関東州や満鉄に関わった日本人との交流も見ることができる。彼のたどった道のりは、まさに中国東北地方がたどった道のりに重なってくるのである。そして彼の清朝時代の作品と民国時代の作品を比較すると、彼の東北に対する思いの違いが浮かび上がってくる。清朝が滅亡し、民国になったことと植民地化はもちろん同列にできるものではないが、清朝に深いシンパシーを抱きながら、民国でも官吏として任にあたることを容認した彼の心境とその変化は、彼の詩に如実に表れており、植民地化を考える上で大きな示唆を与えてくれるものであった。

宋小濂に関する考察は、論文としてまとめ（『塞北の詩人、宋小濂 郷土への思い」2019）を発表した。

(2) 小杉放庵について

宋小濂の考察の過程で、彼と同時代の日本人が当時の中国に対し、どのような印象を持っていたかについて調査を行い、日露戦争期に戦場画家として従軍した画家、小杉放庵（1881～1964）という人物に注目するに到った。

彼は洋画から南画に転身するという、希有な経歴を持つが、従軍した彼の作品からは戦闘の勇ましい場面は見られず、むしろ傷ついたロシア兵や身内をなくした女性の姿などが描かれていることから、反戦画家としての評価がされている。しかし報告者が注目したのは、日露戦争後、南画家に転身した彼が何度も南方中国を訪れて書き残した多くの紀行文である。そこからは日本人がそもそも傾倒し、尊重した中国の文化は唐代にあったことが見て取れる。彼と同時代の多くの作家たち(佐藤春夫や谷崎潤一郎)の作品からもその傾向は如実に見ることができ、彼らが傾倒した唐代の文化と現実の中国のギャップの大きさが、現実の中国に対する客観的な評価を誤らせたことが理解できた。小杉に関する考察は、国際シンポジウム「コミュニケーションという視野の下での東アジア植民地主義研究」(吉林大学)において口頭発表した(「明治・大正期の日本人の中国観～小杉放庵を通して～」2019)。

(3) 野口小蘋について

研究の過程で王宝平氏の業績を知り、『晚清東遊日記匯編』に登場する日本人に関心を持ち、調査を進め、中に10名の女性が含まれていること、うち、経歴のわかる人物の多くが画家であることを発見した。この10名のなかから、南画家として宮中にも出入りした野口小蘋(1847～1917)という人物に焦点を当て、彼女がどのようにしてあまたの政治家や文人と肩を並べ、清国の要人たちと交わるに到ったかについて調査した。調査はまだ途上ではあるが、彼女の得意としたものが南画であるということは、小杉放庵に通じる所もあり、興味深い。残念ながら彼女の書いた詩文は現在ほとんど見ることができていないのだが、彼女の活動を通じて、日本の知識人、文人たちの交遊の様、また清国人たちとの交わりの様が見えてくる。調査、研究の中間報告として、シンポジウム「『西洋』の出現と東アジア知識人の人的ネットワーク」(日本女子大学)で口頭発表を行った(「明治の文人たちの交遊について」2020)。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 2件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 平石淑子	4. 巻 59
2. 論文標題 油彩画「魯迅の遺容」をめぐって	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 史艸	6. 最初と最後の頁 92 - 108
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 平石淑子	4. 巻 4
2. 論文標題 蕭軍・蕭紅と青島 生活と創作	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 中国東北文化研究の広場	6. 最初と最後の頁 25 - 40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 平石淑子	4. 巻 68
2. 論文標題 蕭紅・蕭軍往復書簡 北京 - 上海 翻訳と注釈	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本女子大学文学部紀要	6. 最初と最後の頁 85 - 104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 平石淑子	4. 巻 38
2. 論文標題 塞北の詩人、宋小濂 郷土への思い	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 お茶の水女子大学中国文学会報	6. 最初と最後の頁 19 - 39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 平石淑子	4. 巻 63期
2. 論文標題 “春水”随感	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『愛心』	6. 最初と最後の頁 40～43頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 平石淑子	4. 巻 第一冊
2. 論文標題 謝冰心とタゴール～「春水」と“Stray Birds”～	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『春水』手稿と日中の文学交流	6. 最初と最後の頁 77～93頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 平石淑子	4. 巻 67号
2. 論文標題 東京から - 蕭紅書簡 (下) 翻訳と注釈	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本女子大学文学部紀要	6. 最初と最後の頁 55～75頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 平石淑子	4. 巻 69号
2. 論文標題 「商市街」25号 - 蕭紅『商市街』抄訳	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本女子大学文学部紀要	6. 最初と最後の頁 41～59頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 平石淑子
2. 発表標題 謝冰心とタゴール - 『春水』と “Stray Birds”
3. 学会等名 第一回「東アジアの交流と文学」国際シンポジウム（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 平石淑子
2. 発表標題 看明治・大正時期日本人の中国観 - 通過小杉放庵
3. 学会等名 国際シンポジウム「コミュニケーションという視野の下の東アジア植民地主義研究」（吉林大学）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 平石淑子
2. 発表標題 明治の文人たちの交遊について
3. 学会等名 シンポジウム「『西洋』の出現と東アジア知識人の人的ネットワーク」
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 中里見敬・趙京華・潘世聖・周吉宜・小川利康・平石淑子・佐藤普美子・牧野格子・顧偉良・濱田麻矢・岩崎菜子・宮本めぐみ・虞萍	4. 発行年 2019年
2. 出版社 花書院	5. 総ページ数 255
3. 書名 『春水』手稿と日中の文学交流 周作人、謝冰心、濱一衛	

1. 著者名 木之内誠・平石淑子・大久保明男・橋本雄一	4. 発行年 2019年
2. 出版社 大修館書店	5. 総ページ数 201
3. 書名 大連・旅順歴史ガイドマップ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----